私の提言

所 正文 国士舘大学政経学部教授
1957年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、同大学院修士課程修了、文学博士。主幹総合交通心理士。2003～04年に英国シェフィールド大学Visiting Professor。
産業・交通場面における心理学的研究に長年取り組んでおり、1988年に東京都知事賞、2004年には日本応用心理学会賞を受賞。
近著に『高齢ドライバー・激増時代―交通社会から日本を変えていこう』（学文社）。

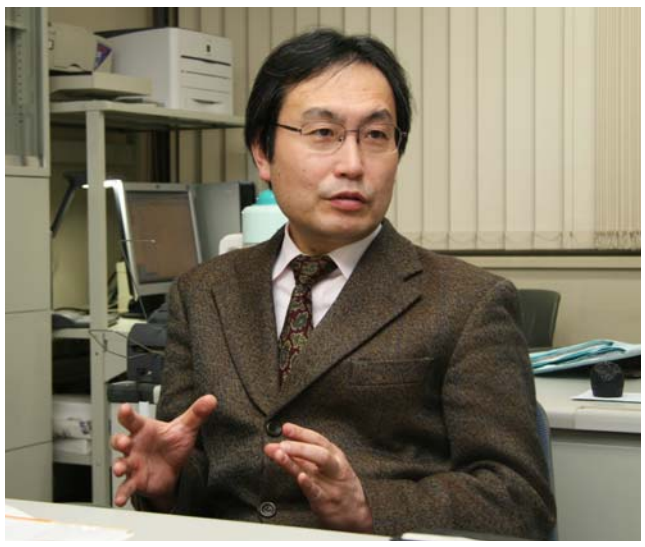
高齢ドライバーが激増する交通社会に譲る心――”ギブウェイ“の精神を！

今年6月より、高齢者講習に75歳以上の運転者を対象とする認知機能検査が導入される。認知機能検査は検査結果をもとに、①認知症の疑いがある、②認知機能の低下の疑いがある、③認知機能は低下していない、の3つの群に分類される。検査結果と過去の事故歴などから①群の高齢者には、専門医の診断を経て、免許取り消し、停止などの処分が行われる。警察庁の調査では、高齢ドライバーの認知症患者の割合は70歳以上で2・5％、75歳以上で3・2％。現在、認知症ドライバーは全国で30万人を超すといわれるが、今後、運転免許保有率が高い団塊世代が加わると認知症と診断され運転を断念する高齢者が増えることが予測される。

運転を断念した高齢者へのケアが課題

所さんは、この検査で運転を断念することになってしまう高齢者のケアが今後の課題だと指摘する。「運転免許は高齢者にとって自立の象徴であり、家族の中での自分の存在意義にかかわる場合も少なくないのです。私たちの調査では同居家族人数が増えるほど運転頻度が増えていました。祖父が忙しい両親の代わりに孫の送迎などの役割を担っていることが想像できます。運転免許の断念によって、家族内で自分が『重要な存在』ということを自覚することができなくなると、高齢者自身の尊厳をひどく傷つけるだけでなく、生きるためのよりどころを失いかねません」。

所さんは、認知機能低下による運転断念へのソフトランディングを可能にするためのアフターケアが重要であり、認知症ドライバーのケア担当チームに医師、家族、交通警察の担当者とともに日本交通心理学会認定の交通心理士[※1]が加われば効果的だと考えている。また、運転を断念した高齢者の移動手段の確保については、地域社会の中で医療、福祉、交通の関係者が連携したシステムが必要という。その1つのシステムとして、利用者それぞれの希望時間帯、乗降場所などの要望に応える公共交通サービス「デマンド交通システム」の導入を勧める。



交通社会から日本を変えていく

認知症ドライバーへの対応を含め、これからの超高齢社会において新たな交通社会を構築していく必要があると、所さんはとらえる。「交通は社会の縮図です。交通場面では一人ひとりが自分勝手な行動をとると収拾がつかなくなるために、一定のルールが必要になります。しかし、必ずしも法律や規則という網によってすべてが制御されているわけではありません。そうしたルールが入り込めない網の目の部分がいたるところにあって、そこを人と人が配慮しあう関係で埋めることで成り立っているわけです。高齢ドライバーが激増していく交通社会に必要なことは、お互いに配慮し合う関係を再構築することだと思います。この点で参考になるのがイギリスのギブウェイの精神です」。

イギリスでは、日本ではほとんど見られないロータリーを囲む交差点が数多くあり、そこでは一時停止は「止まれ(Stop)」ではなく、「相手に道を譲れ(Give Way)」と標示されている。すでにロータリーを回っているクルマに優先権があり、後からそこに入ろうとするクルマは一時停止しなければならない。

「日本では考えられないことですが、イギリスではかなりの交通量がある交差点でも信号機がなく、ギブウェイの標識だけで制御しています。例えば、日本では路地から本線の反対車線に合流したい場合、交通が途切れない限りほぼ不可能といえます。しかし、イギリスでは両方向のクルマが止まって合流させてくれることが珍しくないのです。イギリス人は人に配慮する習慣、ギブウェイの精神があります。これは交通だけに限りません。日本は経済成長して物質的に豊かですが、まだ自分中心といえるでしょう」。

日本にも相手のために譲り合う精神が江戸時代にあったという。江戸商人による知恵、「江戸しぐさ」[※2]だ。所さんは、「江戸しぐさの心」を新しい社会観として現代に復活させることで、超高齢社会に変革がもたらされることを期待している。

※1　交通心理士＝交通心理学を学び研究し、社会貢献をめざす日本交通心理学会会員のうち、一定の基準を満たす会員に付与される資格。知識、経験に応じて、主幹総合交通心理士、主任交通心理士、交通心理士、交通心理士補に分けられている。資格取得者は自動車教習所指導員、交通警察関係者、学術研究者など多岐にわたる。
※2　江戸しぐさ＝江戸商人が円滑な人間関係を築くために生み出したもの。江戸時代の公共交通機関である乗合の船などで、後から乗り込んできた人のために、皆がこぶし一つ分ほど腰を浮かせて詰め、席を作る「こぶし腰浮かせ」などがある。

危険予測トレーニング（KYT）――危険感受性を育てる　第❼回　前車が減速した時（四輪車）

交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を育てるための題材を提供します。今回は高齢者の方に、自動車運転中の危険を考えてもらうためのKYTです。クルマを運転する方々を対象にしたグループ教育の学習の中で活用してください。

前のクルマが少し速度を落としたので、車間が詰まってきました

・あなたは前のクルマに続いて、走行車線を走っています。
・前のクルマが少し減速したので、あなたも速度を落としました。
・車間距離が詰まっています。
・右のドアミラーには、近づいてくるクルマがセンターライン寄りの車線に映っています。

あなたはどこに注意しますか？
イラストの中のその個所に丸印を書き込んでください。

制限時間 1分

©本田技研工業（株）

活用方法

❶少人数のグループをつくります。
❷「交通場面のイラスト」を見ながら、意見を出し合います。
❸その後、「解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すればいいか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4版）」は下記SJのホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード（無料）できます。

http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/

【使用上の注意】
●営利目的での利用はおやめください。
●内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
●その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL：03（5412）1736

今回のKYTの題材は、Hondaの高齢ドライバー用プログラム「いつまでも元気に暮らすために危険予測トレーニング30」から抜粋しています。詳細については以下ホームページ参照。

http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/senior-training/